

# G. エリオット詩集(1)

## ——大学の朝食会——

高野秀夫訳

若いハムレットはシェイクスピアのおどおどしたデンマーク人のハムレットと違う、しかし名前が同じであった。彼は最近我が英国のウイテンブルグで学位を取るために頑張っており、金髪で、謎めいて、感じ易く、総てに問いかけるが、率直がよりよいのかはあまり確信がなかった。総ての相対立するものの魅力に半ば緩慢であり、又最も強大な魂（多分彼自身の魂であろう？）は両極端の和合に半ば疑問を抱き、総てのものを選択すること以外に何の選択もなかつた。今日は酒に恋し、したたか飲み、明日は半ば英國紳士気取りで人生を単なる幻想だとさげすみ、何の性質も持たない“眞実”を慕う別の日には秘蹟に恩寵の源を見い出し、宝石の浮彫りを施した聖体容器や刺しゅうの付いた上祭服に最も純粹な聖なる光の反映を見た。靴下も履かずに両腕を伸ばして断食をすることに決め、恍惚感を待つ、しかしそれよりもけいれんを起こして別のものを求めた。次には一人よがりの異端者となつた。——若いハムレットはやや盛りの年を迎える5人の若者と共に泊り客として朝食の席に着いていた。ハムレットは友のホレイショーと一緒にあり、ホレイショーはほとんど意見を持たず人の論理を育てる特徴のある纖維状の伸びる根を探すのが素早い、しかも弱点は慈悲で隠し、非難はせずに総ての手助けの用意ができていた。

朝食が進み、リンゴ酒を飲み論議が高まり、そこに別の客が座っていた。素晴らしい意見を語るオズリックは生涯這いずり回わり微少な花のほのかな香りで生き続け、太陽を罠にかけるため遊糸を編む纖細な小人であった。レイアーティーズは熱烈で、無分別で急進的であり、議論好きなローゼンクランツと真面目なギルデンスター

ンがいた。

まずアルプスの山々の空想的な氷河からかなり話が弾み、テーマはいつものものであり、息もいつものものであり、又幼児の目も、又日々創造の光で育つ若草もいつものものであった。小さな言葉で力強い意味を持つ、つまり“物質”，“力”，“自己”，“自分でないこと”，“存在”，“らしいこと”，“空間”，“時”，——の小さな言葉が力強い意味を持った。つまり毎日車の往来の汚ない道にいる俗な労働者達が太陽、月を暗くする魔神、怪しげな巨人に変身した。

創造は話のなかで正反対なものになった。誰も“暗黒を呼び寄せるない”とは言わぬが暗黒はあった。“たのむ休戦を！”と見事な調子でオズリックが言うまで雷のように轟くローゼンクランツは議論好きで水中に住む巨大怪物が住家から小さな滝を噴き出す暗黒のなかにゲルマン民族のゆとりを持ってころがり回っていた。

オズリックは親切な口調で話を続けた。

『私はそのお化けの争いが嫌いなんです。色、形そして息が全く足りない言葉の戦は嫌なのです！ 哲学と呼ばれるその味気ない言い争いは嫌いなのです。つまりあたかも青い羽の蝶が花の芯を吸わずにまさに3日間イタリアの原野で空中に漂い、太陽の輝きのなかで釣り合いを保ち花嫁に向かって羽搏き、絶食し思索しているかのようなのです。つまり今もし自分がいないとしたら何があるのか、自分が存在しているように思われるものの代りに何があるかを考えているかのようなのです。哲学の最も深い知恵では確かに花の芯を吸い嫁をもらう青い羽根の蝶々になるべきであろう、なぜならばそれ自体総ての思索は最も悪い場合に三日の命でしかないからであり、つまり総ての蝶々の生存の限界で傷つけ合う争いでしかないからなのであると考えているかのようなのです。』

『私は反対だ』とレイアーティーズは話に割って入り話し始めた。『ごまかしの法の言葉遣いで一つの特性をもたらす結論を導く議論つまり私を蝶、泡、火花とか別の譬えで呼び始める議論には反対である。私の人情味のある口を求める瘦せた乳幼児（編されやすい人）には、私の稼ぐ食物を今欲しがっているので母親（母親のような人）

の胸で乳を飲ませなさい。泡をつまらない考え方から吹き飛ばせ！人が人となる樂、愛、要求、哀れ、友情のために吹き飛ばせ！つまり（もし言い合う譬え話なら海の奥底と言えるであろう）その樂、愛、等は人を蝶（修辞であなたは自分の容易に手の届くところで蝶に値する結論を引き出している）に変えるからである。この世界はジェスチャー遊びの場でもないし、言葉で分からぬ洒落を飛ばす場所でもない、又苦は終止符やつまらないもので減る少數となる心配もない場所である。その事を知っている人達にとって心配はもっぱら心配である。どんなアルファベットの文字も演繹的形式では働いていないし、どんな見事なイメージも又どんなへまな分子によるイメージのフィギュアダンスの失敗も演繹的形式で働いていない。分析を通してその分子は己れの踊を見い出すことを教わり、病んだ体には正しい薬が示される。しかし分析によりあなたの類似を控えさせて下さい。つまりあなたの類似点には棒の形や音楽の縦線がかなてこを意味するのに使われているような視点がある。”

神父は言った，“その点では同意するが、神聖な恩寵を知らなければなりません。まず感じなければならないのは恩寵であります。祈ることによって、全く強くなる恩寵の流入が生じるのです。一通り気付いてはおりますが、次の示唆を除いて私は会話の進路を遅らせたくはないのです。つまりローゼンクランツ君の立場の人は“私達の善”，“悪”と呼ぶ総てのものが最終的に等価であると見なしている。その善と惡の違いはあなた方を落とし入れる生れながらの偏見であり“エゴ”であり、標準を強いて自分の尺度で一つの価値を持ち込むのです。”その頑固で考えても移し得ないどうしようもない価値は反証があっても持続します、つまり鋭い分析によりそれ自体がなくても充実しているのが示めされるところに無数にあるうずき、要求は持続します。がしかし、もしその要求、偏見があなたの言葉を使えばただ見ているだけでなく、あなたがエゴと呼ぶ違いをも暗がりから掘み、考慮に入れる“存在”であったらどうなのですか。その要求のためにあなたは頑固になり“総て”に根ざしている厳しい関係で物の流れを制御するのです。あなたがたの亡き哲学者達のなかで誰が“存在”という真の名を“意志”と捉えますか。私はい

や！ つまり教会は何に於ても反対しないし、満足であります。理性はそれ自体究極の否定にまで行き着いたのです。自然科学と形而上学は空虚のもとで出会い後退し、ひどい偏見にまで縮まり、それらの絶対的なものと同質のものを混せてこくのあるように見せかけた関係にし、又どんなものにでもなる選択をしている、たとえば“なんと”ということもない。教会はもはや何も要求しませんが、その教理にしっかりとした余地と基礎があります。それだけです。つまり“心”と名付けている強い先入観は分解できる波によって一面がおおわれ勢いを増しているが、推論に基づく特質を持ち、思想の争いを是と非で制し、私達の信仰と呼ぶ仲裁をしているだけなのです。”

ここでわずかな沈黙の後、若いハムレットが話した。“神父さんご指導をお願いする。つまり価値に於いてウリムとトンミム「(裁判を行うユダヤの高僧)が胸當てに付けていた実体不明の品、神意を知るための宝石のようなものではなかったかとの説もある」以上の謎めいた宝石がイスラエルになかったという度重なる疑いで私の行為が揺らぐ権利の執行の印をいかに知り得るのか、そのご指導を願う。魂の先入観、つまり“意志”的見事な強調でねじまげられたもの。一度行うと決めた心は冷淡になる時に縮まり、より強くなる逆のものを無分別に除外するようになる、そこでいかに先入観を見つけるかである。”

“あなたの言葉から先入観が聞こえてくると思います。”と穏やかな神父が言った。“飢えと呼ばれる強い生れつきの性向が聞えてくると思います。欲よりももっと積極的なものは何か。精神的、肉体的には問わず、必要な感覚はより真実なる言葉遣いであります。あなたは正当な権利を切望しております。しかも皇帝の支配を印す杖の重みや論調の違いがお解りにならないのですか？ レイアーティーズ君も認めておりますが私はあなたの立場を分析的な方法で考えて見ましょう。つまり医者は何の好みもおこさない飢えを考えて、おいしい鹿肉を熟したナシと想像する気まぐれを避けます。つまり無秩序な徵候を避ける。そして厳しい処方箋を書くであろう。もし私が

医者であつたら充分に従順である心の学習を指示するでしょう。そこであなたは何に対して従順かとお尋ねになる。その答えはその言葉そのものにあります。なぜなら規則のないものに又絶対的に主張するものがないものにどう従うのですか。そう、あなたに、あなたに及ばない支配を好んで経験すべきでないのです。科学は自然の秩序で理由付けられ、唯一議論で存在し動きますが最後の結果についての公約はせずにただ終りなきシーソー状態で快楽主義と禁欲主義との自由な活動を推し進めるだけです。一つの権力、一つの権力だけで単にそのことつまり“従う”と言っただけであります。つまり少なくとも高度な靈的交渉の約束、数字を知らせる頭脳そして数学的交渉の添え物より上の、いやその上の上の才で生きづいている生命がある。その精神的秩序の流れに身を置きなさい！“教会も又組織体”とあなたは反対の意見をお述べになる。“教会は分析され得るし、レンズの日差しのもとで他の全ての生命のただ単なる続きであることが示され得るのだ”とあなたは反論されます。私はあなたの反論を認めます。しかしそのレンズには反論を避ける態度が誤りであることを証する試みがなされないでしょう。機知、最も高度な激情、最も深遠な考えを身に着けなさい。原子の最後の舞では愛の存在の印を意味するそれぞれの分子を作るのが見られるけれどもあなたの愛が依然としてどこにあるのか、どのように測り、どのようにしてその重さを証明するのですか。そして私は次のように述べます。教会の組織体は決して論破されない“存在”や約束や贈物をもたらします。その論争に於いては人の要求を満足させるために教会が考えているものをほかのどこかで探そうとすることに絶えず失敗していることが分かります。だが私の話はくどくなってしましましたが。つまりハムレット君、私の弁明はあなたの質問であり、それはまさに私達の信仰の核心にまで至ったのです。そして私は自分自身聞き手として楽しみを奪ってしまいました。私の約束の相手はウォルティモア君で12時30分です。さようなら。”

誠実な短い別れ、後悔はあるが、しかし他の確証不足故に慰めとなり、最も味のよいハバナ葉巻の匂いでなくなる。それから穏やかに皮肉を込め、静かなギルデンスターが言った。“神父様がいか

に不十分な結論に新たな魅力を加えているのかに驚いた。最も惨めな理屈屋でさえ、最も立派な人を作り、しかもおかしいが故により愛らしく思える理論を持っていることを私は半ば信じた。”

ハムレットは言った。“どのようにしてあなたは神父様が述べた以上の強い立場に気づいたのか、そのことを喜んで聞きたい。移り変わるべき心よりも高度な“本来の状態”，目に見えない“秩序”への信仰を除いてあなた自身の反対がいかに卑しいことか聞きたい。科学では水素が天空外で燃え上がるのを観て、そっくりそのまま触られていない神秘があとに残される。いや私達の血のなかで、それぞれの細菌の有力な元素のなかで生きる神秘は、感覚で捕えたり、思考で察知するものがたとえどんなものでも、それを包み込みそのなかに入り込む。科学ではその魂が説明そのものなので神秘に対して嫌悪の態度で立ち止まる。教会は神秘をその帝国と考え、矛盾の間の穴を埋めるため豊富にありそうなことの導入を図り、同様に觀念を否定する信仰を是認し、又教会はその総てのおうへいで“それ故”的残酷な繋がりを認める。科学は、総ての愛の半分を作っている“形”がレンズで分解される。それ故愛はその時から男／女やもめのままで、存在しないものを狂乱の凝視でじっと見つめて後に残されるのである。教会では説明されず抑えられ、心の経験や人の憧れで満ちているヴィジョンで堅忍が育てられるのである。”

“アア！”と親しくうなづいてギルデンスターは言った。“私の知るところによると神父様は空中の乗物で、ハムレット君、あなたを捕えた。彼の考えは手の届かないところに強固な障害物で虹の橋を掛け、粗野でありふれたものを蒸発させて靈妙なものにする。教会に於て真なるものは形跡もないものであり、そして（まさに挿入として）何があなたの顔を凝視し、傷つけるものなののかは決して気にしないよう乞うのが彼の考え方である。ところでそのようにして私は人生の惡に対する唯一の防衛に合わせようとして人の背中に乗るそれぞれの迷信と暴虐行為の弁明ができた。利益、美德の理論のないものがいかに残り得るのか。専制君主は赤い右手に恐怖を抱き支持者達や自分達に善を示さなければならぬし、奴隸達の生活の選

択として利益の果実を服従で得るようにさせなければならないのです。彼等の論理では拷問や、杖の不便を、武力迫害の不便を、さらに事実や具体的集団に於ける総ての生来の粗野なものの不便を取り除くことにより純粹な考えが表わされるのである。ただ厳しい従属によってのみ見い出される“秩序”で保証される。つまり究極の善は自然の法で強者が当然の帝国を持ち、ただ分裂してしまう弱者を支配する厳しい従属関係、強力な聖職組織制度に於いて見い出される。あなたは何か反論ができますか。金の匂いによっていかにひどい邪論の意識が導びかれて来たか、それをあなたの狭い考え方からそらすならあなたのその“審問”はつまり、その“審問”は崇高であり、又それは人の魂のなかに毒が広がるのを防ぐ愛である。だがその炎は空しい、より大きな苦痛を妨げるより小さな苦痛のみである。つまり多勢の人を救うための一人の苦痛であり、世の中に産み出されるあらゆる制度の心臓の動悸のようなものである。それ故教会員とその“長”的高度な靈的交渉としての教会に於ける微積分を超えた精神力の泉は人の要求を満足させる教会の唯一の力に証明をもたらす。それは次の言葉のように、明らかに、理想的な真実のようであり、目に見えないが必要であり、その最後の主張にひっかかりを見い出すまで惑星と太陽のバランスを辿る言葉と同じほどはっきりしている。“人の要求を満足させるため”ところでそれは時と場合によるが、私達は詰め込む許容量を認める前に、まず人の要求を測る。あなたは使徒ヨハネ、使徒ヤコブあるいは使徒トマスに満足するであろう。しかしあなたが理想を選ぶので私は教会が理想の人の究極の理性と愛を満たすことを要求する。しかし理想の人の理性と愛は飢えたままであるといなさい。そしてどんな意図も理性と愛が満たされず、呪われた世の中であると捉えなさい。そして“理性”によって“愛”が嘲笑される、そこで見捨てられた“愛”的ため、孤独の叫びのなかに望みのない反応が返ってくるその“キリストのはりつけの地”を思いなさい。そこでさらに魂はあなたの半ば中途半端な教会よりもより大きく膨らみ、神聖なものになる。なぜならばその教会はあなたの理屈を間違った同意のために無理に使い、利己的なパン切れであなたの“愛”を慰めるからである。“その点で私はあなたに同意する。”とレイアーティーズは叫んだ。“もしさらに心

のなかでより崇高な“権利”，“善”によって愛と崇拜が強いられるのを知ったならば“山”から雷とともにやって来る指図だが，それは私にとって何なのか？この世間はそれぞれ思考力のある反逆者をすぐに見つけ殺害する力を備えているけれども死に戦いを挑む言葉，信仰以外の殉教とは何か。つまり殉教は私のものであり，又その殉教は世の鼓動以外に見い出される苦しい動悸としてたった一つのものであるが，私の最高の真実として留まっている。従順はよいことだ，だがしかし何に対して？そして何の目的で？あなたの規則は悪魔的だと反論する私の言葉に対してである。つまりあなたの規則は人の最も高度な徳を否定する雷のお導びきの力によるものであると反論する私の言葉に対してである。そこで反論とはあなたの雷をばかにするよう乞う別の規則に厳しく従うことであった。”

“ところで，さあ！あなた！”とオズリックが婉曲的に言った。“ところでレイアーティーズ君，まあ，あなたは現代の悪魔の殺し屋としてやって来ております。つまり総てに戦いの熱を込めて疑いの教理の放つ光で総ての社会の沼を浄化し，疑いに対しては個人的判断と嫌惡の勢いで熱くなっています。やさしい水の急激な増加に合わせ，松の木の下でダフニの調べにのる時あなたの最も嫌いな私の主張が語られるがあなたはそのためにやって来ております。あなたの信仰は単に“趣好”以外には根本的に何なのですか。妥当な意志以外から来る総ての要求の解除をあなたにお勧め致します。つまり私の精神的空间に入り込み“私”を碎いて，“あなた”的従属的おだてにのせることで充分に力を示すまで，確かに自分自身に出来たり，除外したりすることをお勧めするし，あなた自身の妥当な意志のバランスを取るために究極的内面を搔り立てることをお勧めする。そのように究極の絶対必要なものは総ての者にとって同じである。それではあなたの聖戦を説いて下さい。そうすれば攻撃的で教養もあり，しかも大騒動を好む総ての人達が加わるでしょう。しかしあなたの不愉快な“義務”や感覚的に嫌悪感を与えるものを選ぶあなたの熱望は“趣好”に他ならないし，私が思うに「言葉が許されるなら議論で強いられております。」都合が悪いことに於いて私のものと異なります。”

その口調は大変礼儀正しくて悪い思いをさせることがなく“悪い”ものには堪えることを示して機嫌をとる人にふさわしいものになった。声の高いローゼンクランツはより粗野な動きで話題を受け取る激したレイアーティーズのような好みで理屈を抱く理屈屋を溺愛することに軽蔑を表わすのを常としていた。つまりローゼンクランツは耐えられないほどの疑しい5つの宣言をしてそれから言った。“あなたによって崇高なものになっている善をどのように理解しているのか。その善はこの共和国として、あるいはあの君主国としてその顔つきをはっきりさせ、堅固無比の形で表わされたのか。善は連邦の取り合わせとしてあるいは自治都市の取り合わせとして表わされたのか。善によって平等、あるいは見事な社会的相違の輪郭が表されたのか。善の表現は激しい悲喜の夢中の騒ぎ、かんばつか。善は人の悲痛を分ち合う共感にあるのか、あるいはその悲痛を見事に表現できる冷静な頭にあるのか。賞賛される敵の奮闘の訓練にあるのかあるいは賞賛している心にあるのか。危険にあるのかあるいは安全にあるのか。戦いの怒りと変幻自在な幸運の頑丈な挑戦にあるのかあるいは一律に充分に培れた口先のうまい田舎じみた無感動にあるのか。どうかあなたの“善”を大多数の拒絶の及ばないところで定義して下さい。次に善はその唯一の概略と思われる“悪”がなくて存在するのかを明らかにして下さい。楽しさが侵されない世界を示しなさい。あるいは発展の行為でまだ変化し均等化される苦難の世界を表わしなさい。なぜならばそれはあなたの人間の善の説明として役立つからである。その善は（あなたの希望の目標である）その完成に於てすぐに消滅することがないし、“変わることのないもの”的深い底に眠り込むことがない。あなたは何のために働くのか。それから充分なはっきりした考え方でよいものと呼ぶものは何か。つまりまたあなたのものになっている偏った目的を除いて総てによいものと呼ぶものは何か。バランスの取れた統一体のなかで波にしか過ぎない明示された形跡で思想と望みを結び付ける厳格さをどうして身に着けるのか。“相対”は善についての活快な多弁を黄金に変える魔法の言葉か。その分析をあなたはある分子の直列の世界から自分を一掃した反社会勢力として激怒しているが、その分析は兄弟のような“相対”であり、相対では、分析によってニューイングラン

ドもオーストラリアも拡大してしかも意義付けるまで社会の外へと送り出すことを考えていた囚人達、その囚人達によってあなたがにやっと笑われるようなものである。その“絶対”はあなたの影であり、あなたの述べる宇宙はあなたである。たとえあなたがぎざぎざの付けられた最も薄っぺらな上皮のそりのような状態や、何も厚くない均整のとれた状態になったとしても本物になることを示す宇宙はまだあなたである。”

“彼を社交的にする総てのものを逸している”とホレイショは口を挟んだ。しかしローゼンクランツは人の気取りをがみがみ言う時、膨らんだ薄絹で耳がふさがれ怒った七面鳥の雄のように人の話を聞こうとしない。“ちえ！”君は自分の“相対”で自分の結果と共に“飢えた塔”の中のようにどうしようもなく閉じ込められる。あなたの社会的善は他の神々のように代るがわるこの上ないものとなり又偏見のはかない影となり、種族や国家のムードを導びく狂信者のムードにぴったりの原因と結果の集まりとなる。もしもあなたが剣を見せることができるなら、それどころかもし剣の恐怖で総てのどん欲、色欲を支配するほど絶えず不穏になっている刃の先で、内なる目に差し迫ってぶら下がっている剣のチャンスを示すことができるなら、又その恐ろしい剣が強いる最高のものとして見事に書かれ認められた律法を示すことができるならば、その時私はあなたの“権利”“義務”あるいは“社会的善”を認める。たとえ一度それらが強力な律法の尺度で行われてもその尺度はかなり下がるが、しかしそれらの権利、義務、社会的善はそれぞれの行為に知恵、あるいは愚かさの変わることのない印を示し、説き進めることができる。その時まであなたの標準や基準はどこにあるのか。“いつでもどこでも総ての人によるものは”——ええ！それはただ“習慣”だけであった。あなたの制度はまだ決して一体となっていない理想を必要とし、しかも“習慣”的な差し迫った破壊を必要とする。

それぞれの人のなかに直観を超えた訴えを見つけることができるのか。かかしで目の見えない人を驚かすことができるのか。総ての畏敬に近づく手段では心のイメージリーの小部屋が食欲によって制御されるところで目に見えないものの畏敬を高めることができる

のか。“進化”に合わせ、あなたは贊美歌を歌い“進歩”と呼ぶ聖なる玉子をあなたの祭壇に置いた。総てが係わりおののおのの変化が利益とも損失ともなるところではあなたは本当に良い唯一のものを証明してきたのか。熱と祈りで補われた健康そうな“トカゲのような人”的時代のおかげで、ひどい病気とわずかな楽しみの人の時代は充分にバランスが取られるであろう。つまり怪物が飢えた集団のなかで富を貪ったところで、また、“これ”は“あれ”であり、これもあれも両方が弱り果てた生命を通し誤りを増すことだけでよいことがなにもないことを証明するために実験室でエプロンを掛け励んだ知識人がいたところで人の時代は充分にバランスが取られるであろう。

一方“芸術”と“詩”は暗がりや納骨堂のなかに潜み鶲や恐ろしい明りを避ける憐れな亡靈のように争っている。又手足はまだ活動的で、スリッパを捲し回る遊びやフットボール、隠れんぼをしたりしている低能な二人の頑丈な老人が大変陽気になり、エプロンを着けて競争心まるだしで舌足らずの話をしているように“芸術”と“詩”は争っている。おお人の争い、それがあなたの得た総てか。つまり反証に努め遊び半分に信じ又遊び半分に結果の嫌な原因について論議をしたり又総ての要素を変形させて避けられない技を振るい、運命を厳しい破壊以外のものにする力、その力の欠陥について論議することであなたが得た総てのものは何なのか。“トカゲの仲間達”的ほうが好ましい——ギルデンスター君そのローソクを渡してくれ、まだまだ怨念は最上のタバコで緩和されるから,”

そこで素早くレイアーティーズは怒ったライオンのまなざしをする。“私は言葉であなたに感謝する、もし私がソクラテスであったら、気楽に座り、物知りらしく人の善を否定するようにななたを育て成長させ、総ての善の冒瀆に対しては総てが偽りであることをきっぱりと示すあなた自身のイメージで頭脳を巡らすまであなたを先へ先へと強いるという告白がある。そうだ人生は最も良いものに対する貧弱な付けたしであり、英知は何もないものの憧れである。自然の偉大なヴィジョン、そして思考によって培われた感情のぞくぞくするような崇高さは単にたわいのない劇にしか過ぎない。そのことであなたに反対はしない。直観の愚かさ故に理知が愚かである

という大変ひどくはまり込んだ立場で主張する時、理知が機知のあるものと証明のできる人はいるのか。いやいない。例え人生があなたにとって価値のないものでもそう人生は存在する。“あなた”が友情の示されるほんのわずかな愛の感触しか知らないなら、又物事の特質に応えるほんのわずかな力しか知らないなら、生命に終止符を打ちなさい。願うことのないくびきは投げ出しなさい。そうでないならつまりもしタバコを味わうために居つづけるなら、愉快な言葉遣いを選んで、しかも花冠を得ることなく、又優等卒業試験をパスすることもないさもしい人の沈黙の軽蔑で長々と熱弁を振いなさい。その時少なくとも大地の諸々の種子のなかの考えられる“よりよいもの”を認めなさい、さらに混った種子をふるいにかけ、辛抱強い技で“可能なもの”をテストし、未来を継承する善の前で悪に挑みながら運命に終止符を打つよりはむしろ自分の選んだ運命にするような人生に恩義を認めなさい。つまりあなたが哲学を育て、栄え、話し合う国家、社会を造り上げるためみんなでこつこつ働く仲間の多くのイギリス人の運命よりは自分で選んだ運命にするような骨の折れる人生に恩義を認めなさい。私は苦痛が美であり、苦しみを憂えることに於て美德を学ぶことで苦しみが容易に説明されるというひどい虚偽に信念でしがみ付かなければならぬ楽観主義者でもない。しかも私は次のように考える。つまり人の望ましい仕事で自分のために作り上げられた贈物を手に入れ、おいしいパンを味わい、盾だけを持ち武装せずに、目に見えない律法を認め、歩きたいと思うところを歩き、家庭、家族の救済事業を認め、体と感じる心を技と思考で表現し、しかもこつこつ骨折って働く価値ある善良を否定する人は極悪人に於てメフィストのふりをした詩人よりもひどい破滅で呪われる。“悪魔”は自分の運命として地獄火を意識して総ての善良なものにこじつけの理由を編み上げ、この“世”から決して慰めを産むことがない。”

レイアーティーズはいきまいて一息つく。するとギルデンスター  
ンがより冷めた手腕で一斉射撃に転じる。

“ローゼンクランツ君、最も許しておけない君の挑戦を受ける  
——あなたはどこで厄介な法を、つまり是認による強要の規則を得

ているというのか？ 又どこで雷をその手に持ち王座に就く“理想”を得ているというのか？ その答えは、目覚めている人の意識で“物質世界”を認知して以来あらゆる信仰と支配の力が産み出されているその場所にある。なぜならばその物質世界の制御しがたい勢力はまず欲望に抵抗し、それから恐ろしい“不可能なもの”的抑圧で欲望を従えた。そして活発な心を実行できる目的でせき立てそれで心の恐れと心の愛を形作った。ところであなたはそのことを語った。つまり諸々の脅威と約束はその力に於て一人一人の直観に基づく。が総ての神聖な規則が想像されたり、暴かれたりしても知覚力のある感情的な心と離れては形や有効性を持ち得ない。

神、義務、愛、服従、友情は一つの法として人から離れて生きる前にまず音楽のようにその人のなかで形作られなければならない。そしてさらにそれらは育ち新たな形をなして“人”と呼ばれる最後の結果を出すために内と外のエネルギーの生命は混ざり合うことにより充分に集まり、さらに育ち新たな形をなす。その結果の意味は美を十分調べてもほんやりしているあれやこれやの学者でなく、又最後の電報で見事な嘘をつくペテン師でもない。それは相互の必要、骨折り、信頼そして愛の流れであり、又一般の視線を越えた立派な態度を作る渦巻くほどの多くの人達の要求でもある。内なる“理性”が神秘に縮まり、内なる英知が愛情に飢えて思いこがれるのか。いやそのようなことはない。外部の“理性”的おかげでこの世の中は包蔵され、必要なものの強調で愛情が再生され、発見で知識に新生命が吹き込まれる。するい内気な“自我”には大失敗の主を示し、信頼の輪を広げ、社会全体をより洗練された敏感な関係で織り上げる。“為政者のグループ”と汚れた手の百万長者達がこの世の組織を支配しているのか。この“世界”（の抑圧）を搖がしているのか。さらに自分のなかで“総てのもの”によって引き起こされるあらゆる同情的な震えがなくなってしまい、類人猿へと退行する人を決めるのはそれらの為政者のグループと汚れた手の百万長者達か？ その後、それら“為政者のグループ”と百万長者達は秘密の力として洪水のように溢れ出た人の要求を差し止めて、自分達の商業の所有権で魚の池の代りに秘密の賭ばく宿を建てるのか。

人と自然が聖職者の下で混ぜ合わされた広い現実と理想の世界で彼等は寄生虫的成長以外のどんな状態であり得るのか。自分を覆っている哀歌を得て、悪は栄え、善が滅びると言ひなさい。又科学は過去の歳月を経てのみ人の信仰の地と天空を造り上げて來た。理想の総てを衰えさせ、死滅させるだけなのである。そうだ私達が人と呼んでいる“存在”の小さな弧は消滅寸前である。つまり成長する生命と思われるものはより劣った形へと即座に下品な退行へと急いで変化する以外の何ものでもないのである。ところでこの世の死滅しつつある善のために、嘆く人達は自分達の共通の悲しみを寄り所と考えるであろうし、又きちんとした宗教、崇拜、儀式や情熱的な憐みを寄り所に持つであろう。つまり死の苦痛のなかで十字架にかけられて神に見放されるけれども“最も良いもの”を崇拜するであろう。又この世の死滅しつつある善のために嘆く人は手酷い反証を手中にして精神生活をそのままに維持し、絶えず悩み苦しむ人の力を養う賞賛と望みのない愛ですっかり純化するヴィジョンを持つであろう。

### “宗教的な高まりだ！”

(ここでローゼンクランツ) “しかしそれはレバノン杉のように子供でも教えられるようなほんのわずかな数の伝達者にとってである。世間が要求するものは大勢の人達に対する威圧的な信仰である。”

“いやギルデンスター君、あなたはあまりにも彼を認め過ぎている。”と突然レイアーティーズが口を挟んだ。“すっかり住みついで、働き、人を愛し、勇敢な死をとげる充分に活発な人生に悩んでいる放蕩者の朝の憂うつにしか過ぎない弱々しい冒瀆に私は何の法も一切認めない、古い国家には古いタイプの子供が育ち、赤子はしなびて、若者はだらけて懷疑的になり、死ぬ意志もない人生の弱者になるのだ！ 彼等の愛情は亡靈達の幻の食欲だ！ つまりこの世の中は中身が欠けているので把握しようとしてもするりと抜けてしまう。その時に彼等の愛情は血の気の失せた亡靈達の幻の食欲だ。彼等の考えは決して躊躇もなく動き成長する生気に満ち威厳のある微生物も把握できずにいる総ての死んだもののひからびた殻だ。だが彼等

が絶叫し、誇っているのを聞きなさい。知ったかぶりだあなたは！まあいやだね ローゼンクランツ君！ あなたは頭脳と、見事な話し分ける低音の話し振りの言葉とをこのしわがれた未熟者のために使うのか、つまり耳をふさぎ本当に男らしくない者に対して強い賞賛を求めようとして努める未熟な老いぼれのためにその頭脳と言葉を使うのか。彼等はみんなけしからんやつだ！ 賢者達、訴えるように泣く吟遊楽人達、哲学者達は樂に生きて自殺についてペちゃペちゃ喋り、自分達の安樂を増やして国民から甘い汁を吸う。一方警句、哀歌を口に出し、彼等が生きている一般大衆の蓄えを用意する総ての熱心な仕事を嘲笑し嘆く。英知は無味にされた感覚なのか、単なる嫌味なのか。ところで愛で激したどんな迷信でも、又論題で吹き込まれたどんな迷信でも、さらに用意された枠組みを通じ抵抗なく流れる勢で手にお得えなくなったどんな迷信でもその生命には、個性を見破っても何もならない人よりも人間らしい真実がある。なぜならば個性を見破っても何もならない人の頭脳には楽しみに於いて冷静過ぎ、この世の中を印のもとで見る空しい弱々しいむずがゆさがあり、青空を単なる青と軽蔑し、ただ“それから何？”と述べるだけである。だがその青空の自然の外觀が恐ろしいほど不足していることに於いては顕著である。又不毛の唯一の絶頂は“光”を造りそれから“光”が“なかったほうがよい”と述べるぐらつく“意志”であるが、その不毛への崇拜心が頭脳によって引き起こされる。”

ここで向こう見ずなレイアーティーズは怒ったポリフィールのようなヘンデルの曲を持って来て中休みに入った。オズリックは以外に熱心であることに驚いて、テナーの声の慎重な話ぶりで聞き手の気持を和らげた。

“私に関しては総ての宗教的、冒瀆的もくろみに対し、ローゼンクランツ君と意見を共に致します。総てのよりよい趣好を持った私達を激しく打ち服従させる杖、その杖の口実として“善”を翻す総ての宗教的、冒瀆的もくろみに対してはローゼンクランツ君と意見を共に致します。そのもくろみとはひどい不名誉の危険にさらされている私に単なる“実利主義者”的の己れの人生を如何に過ごすかを注意するよう求めることであります。つまり英國の乞食の数がゼロにな

る前にその数が 1 から 2 に増えたかどうかを注意するよう求めることがあります。そして、どれほどテュートン人がローマ人と異系交配をするか否かを、又人々が総てのヨーロッパ、アメリカを結び付けるために連合軍を組織し、戦で総ての政府を投げ倒し、世界の財布を奪い、ギロチンを続けるか否かを私に注意するよう求めることがあります。あるいはほかに（これらの事が偶然と認める）微粒子で風景を隠す巧妙な“アラレ”で私を狩り立てることであります。又誰もどこにあるのか分からぬのに星が動く速度や速報掲示板を意味することを主張することであります。しかしあなたが倫理ではなくて、芸術的成長を求める“詩”の枯れることのない若き、又権利ではなくて愛らしいものを求める“詩”の枯れることのない若き、 “芸術”の生命を冒瀆する時、話は別になります。又燃え上がる山と海の間を恐れも知らずに放浪し、地震や溶岩の流れにもかまわずに時を美で埋める詩、その詩の甘い枯れることのない若き、芸術の生命を冒瀆する時、話は別になります。芸術では厳しい争いも節制も、不屈の決心も、いやな辞職も、新しく生まれた“真実”という名の新鮮な幻想のおせっかいな強調も、又古い誤ちの最近の申し子についても一切知らないが、しかし湖に映るように総てのものをイメージします。だが、その深さに於いて総てのものより愛らしく夢見る——音でわくわくし、多くの液体の線のハープを作るのである。 ——これが“芸術”であり“詩”なのです。私達、その芸術、詩の支持者達は“堂々”としており、幸運にも 4 大要素（地、水、火、風）の結合から産まれております。“ディーロス島の神”（アポロ）よりも素早く消滅するがそれは私達の運命です。しかしそれでも大地には私達のためにどっと花が咲き始めます。そして人の悲しみは私達の耳に届いた時に、神聖なメロディーに合わせて滅ぶべき衰微となります。嫌惡、戦争、悪徳、犯罪これらの人間による激発、旋風、洪水、あなたの望むもの——力の突発は対照によって芸術に糧を与え——名人の筆や詩人の詩に堂々とした感じをもたらし、ベスピオス火山の火のように、又大きく口を開く海に木の葉のようにもてあそばれる艦隊のように務めます。つまりその火と艦隊を遠くから眺める時、詩の極地を維持して汚れのない鏡をいろいろな世界に向ける選ばれた人達、その人達の静かな壯美は深まり、世界の多くの名に

ふさわしい多弁には心に描かれた無邪気な精神的生命が与えられる。その精神的生命には、理想的な楽しみにより強烈な鋭さが加わるための悪と苦しみの小さな仕掛けが共なうが、しかしそれ以外には、芸術の枠組み本来の純粹な美の選択だけが共なうのであります。これが混血の地球なのです。この粗野な地球で作り上げられたより優れたものの総てが一般に認められた権威となります。一般の平均的意識を越えた良い物であるとそれ自体主張するあなたの鼻にかけている美德、それ以外に何があるのですか。自然是不公平に存在致します。(おののの惑星の釣り合いには、わずかに、不幸にも、変り行く幅の二つの両極が備えられなければならないのです。)：私達は自然の寵児であり、自分達の翼を受け入れております。ローゼンクラント君、君の非難ではその翼の技が時への恐れ、弱さへの関与となります。私はそれが何にも意味を持たないと思います。なぜならば純粹な芸術、詩にはそれ自体のを除いて総の標準に合わせてもやましいところがないし、又道徳、科学、哲学に於ける近代、古代についての説明がないからであります。どんなつまらない反対論証もそれ自体のクビキになりません。その法と物差しは組織、国家、綱領の浮き沈みから離れて、又実利主義者達が人の幸福と呼んでいるものから、離れて働く多感の見事な調和であります。”

“ああ私達はみな“詩”の信奉者達を知っている。つまり全く人であることを忘れて詩を吟じ、眺め、食物も取らずに、腹をすかして死ぬが、その報いとしてキリギリスのように生き続けるまで詩を謡う、そしてそれによってうっとりする詩の信奉者達を知っている。”——レイアーティーズはこれだけ述べる。がその時彼は筋肉に危険を感じている人のように自制した。そしてギルデンスターがより静かな確信でそのためらいを埋めて述べた。

“親愛なるオズリック君、あなたは自分の翼を使い、総ての議論の届かぬところで安全な姿勢を取り、それから思うがままに独断的に意見を述べている。(昔の人や哲学者にいやあなたが最も嫌っている“実利主義者”に知られている方法で) そうでなければ、もし矢があなたに届くならまさに趣好、美、多感はどこから来て、正しい好みに洗練されるのか尋ねる。恐らく“なんじら”は神々であり——“な

んじら”はそれらの香りを生けにえの匂いを吸い込むのだ。しかしこれは！ どうして香りは感じ、中味の穏やかな変化によらなくとも作り出されるのか。あなたの美しい花は、種子のない、根のないものなのかな、あるいは多くなる人の争い、秩序、知識の総計を意味する成長と共に増えるのか。感覚はより正確なより充分な素性通りに、つまり、それぞれの激情の力より正しい導き通りに鍛えられるのか。血の氣のないバラ色の肉体を私のために手に入れなさい。構造がより単純な存在から多様に働くことのない素晴らしい香りを手に入れなさい。それから人生の組み立を意味する思想主義、身分から離れて生きることができるとしてあなたの“美”を見せびらかしなさい。お願いがあるのだがオズリック君！ 全然誤のないものがより普遍的であるべきであるが、では人喰い人種と共に戦のダンスに加わりなさい。中国の音楽を聞きなさい。いれずみの顔を愛しなさい。それが芸術であり、詩である。そうあなたは反対の態度をとる。その高慢な不一致はどうであったのか。つまり“今”，“ここ”から意識を感覚の届かない範囲外のより大きな総体に広げ、より充分な調和に合わせて、激情の震え、事実のきまりを制し、眞実と欲望を混ぜ合わせた充分に輝やく感覚の光で間違った理想を曇らせる社会人に変化がないとしたら、その不一致は？ 趣好と美それらはより充分に成長した素晴らしいバランスによって作り上げられた完全なる先入観に対する心の選択以外に何なのか。趣好と美は、愛、思想、喜びでの最も緻密な変態の感覚によって、又あらゆる人生の諸作用での増える一般人の知識の蓄えによって作り上げられた完全な先入観に対する心の選択以外何なのか。それから趣好と美は全く根と枝で変形的に動かす力のほとばしりのようであり、纖細な紫色の花冠を着けている植物のようである。”

ギルデンスターは話を止めた。そしてオズリックの話以来震えていたハムレットはさしあたって一向に偏しない試みから変わり、手ぬるくなり、あえて述べた。

“私には次のように思われるのだが、君の議論によるとギルデンスター君！ 多感は社会的秩序から離れて動くことができるというオズリック君の視点を打破しているけれども、だが、しかし（あなた

の議論によると全く総体から成長しているに違いないことを認め  
る) 詩の生命は独立した機能を持ち合わせるというオズリツク君の  
主張がまだ無効になっていない。つまり詩の生命は独立した機能と  
実際的なものの厳しさから自由に変形した領域がある。そこに於いて  
エンジンの唸り声に、熱心な群衆の叫び声に強襲されたもの、あるいはより総体的な世界から隠されているものがサファイヤ宝石の  
洞窟に於ける水滴の音のように美しく甦える。

最も素晴らしい精神は原因と結果の厳しい重大な必然性によって  
支配されずに、絶妙な選択で自由に動く領域である。なぜならば“理  
想”には私達の喜び以外に何の考証も信仰も求めない展開があるの  
を認めるでしょう。全てを特許し広がり行く大地、つまり美德も地位も  
習慣も正義もそして真実も“喜び”的名前しか持たない広がり  
行く大地、その大地の新たに発見された大陸が私達の喜びの世界で  
ある。そのように“芸術”的創造物は、より下品なものが最も少な  
く混り合ったものに靈妙される時、喜びによって最も高尚なものと  
印されるでしょう。”

“考えられる！”

と疲労気味にギルテンスターは言った。

“しかし、その時には何が粗野で、上品で下品かが論議できる。”

“いや”とレイアーティーズが言った。

“その理想の王国の中で支配権を握ってきた、しかもまだ握っている  
最も強大な創造主達に尋ねなさい。この争い合っている世界の自由  
なドラマを通していろいろな行為にときめく心臓の温かな濃い血液  
と習慣とを彼等の考えから取り去るべきか否かを確かめなさい。さ  
ようならホレイショ君。”

今それぞれ、各自が別れの言葉を述べる。“さようなら。”朝に始  
まった食事が日中の半ばを過ぎる。牧場のニレの木の南側にある枝  
に暑い太陽が照り、その影は変わり行く記憶のようにゆっくりと忍  
び寄り方向を変えた。そしてハムレットは川のそばで新たな六月の  
波打つ草の間の紫色に染った小道を一人であてどなくぶらぶら歩いた。  
その川では客で一杯になったボートが停っていた。又そっとオールを漕ぐたびにだるそうな音をたてて動いているボートもあった。

総の音は、ためらうような静かな岸辺のなか小さな銀の鈴のように軽々と聞こえていた。鳥達がさえずり、そのさえずりはそれ自体全く愛で満たされている“静けさ”そのもののように思われた。それは総ての甘い憩いへの誘いであった。そしてハムレットはリンゴ酒とあいられない感情とを混せて飲み込み、うとうととして緑の長椅子を選び半ば閉じた目で牧場の道、川の流れ、そして夢見心地で光に目を向けた。そしてその道、川、光それら自体がアンセルム、ダーウィン、コントそしてショウペンハウエルとの語らいに於けるうねっている時と心、最高の意志と個々の主張、社会的“義務”と抒情詩人の自由、デモクリトスとピタゴラスとの奇妙な連続の中に消え去るまでハムレットはその光景を見ていた。そして詩人達は仲裁者として呼び出され、ゆっくりと墓から起き上がる——ハムレットはまどろみの境界の世界へといざなわれ、そして感覚は完全に閉ざされる。

そしてそれからハムレットは（彼が述べるに）目覚めてからも自覚しているほどの大変鮮明な夢を見た。

しかしその夢の教えは今は差し控える。

多分そのより真面目なよみの国の住人はハムレットに次のような事を気づかせたであろう。

せいで語られるヴィジョンは湯水のような弁舌でその価値が離れてしまい、そしてそれは魂をより広大なる虚無の中に置き去りにする。

### [注]

テキストは Lucien Jenkins, ed. *George Eliot collected poems: A College Breakfast-Party* (SKOOB BOOKS, 1989), pp. 160-184 である。